

被災地（市民）カーシェアリングの作り方

一般社団法人日本カーシェアリング協会代表理事 吉澤武彦

2012年12月現在、私達は約60台の車を活用して石巻市を中心にカーシェアリングを行っております。昨年4月に「カーシェアリング」という言葉を初めて聞き「大量の車を津波で流された被災地で車を共同で使う」というシンプルな発想の元、車を一度も所有した事のないペーパードライバーだった私はわからないなりに突き進んできました。簡単そうに聞こえますが、いざやってみると市民によるカーシェアリングの事例は日本ではきわめて少なく、色々と模索しながら作っていました。

（今でも模索中）

これから始めようと思っている方に、できるだけ「ショートカット」してスムーズに推進いただけるように、私なりの「被災地（市民）カーシェアリングのやり方」を今までの活動を整理しながら紹介したいと思います。

1. まずは車集めから『今いる場所から、手元にあるものから動く』

私が最初に取り組んだのは、車集めです。はっきり言って車がなければお話になりません。逆に車さえあれば後はなんとでもなると思ったのです。会社四季報を本屋で購入し、当時の事務所から近い順に一部上場企業を訪問していきました。内線で秘書課に繋いでいただき、社長にダイレクトに企画書を渡していただけるようにお願いして周りました。上場企業でなくても車が駐車場にたくさん停めてあるのを見つけると、立ち寄って話をしていました。

私の基本的なスタンスは「今いる場所から、手元にあるものから『動く』」です。感じたままに動きながら考えるという流れの中で物事を進めています。ただ、実績のない私に、「はい、わかりました！」と車をくださる会社はなかなかありませんでした。しかし、私のこうした動きを知った色々な方が、車関係の会社の方や上場企業の重役の方等を紹介してくださり、1ヶ月程かかって2台の車を企業からいただける事になりました。

ました。

現在私達の車の約6割は企業から、4割は個人から提供いただいたものです。しかし、企業からいただいた車のほとんどはガリバーインターナショナル様からなので、それを除くと個人からの寄贈が大半です。ご高齢で運転をやめる方、亡くなったご家族の愛用していた車を役立てたいという方、都会での生活あまり活用しないからと手放す若い夫婦等、被災地の役に立つなら車を手放してもいいと思う方は思った以上に多いです。また提供いただいた車は本当に状態のいい車ばかりでした。これから始める方は、個人から呼びかけを始め、小さな実績を持って企業へのアプローチをする事が一番スマートだと思います。

2. キーマン探し『人選のポイントはいつも人柄』

車を確保してから私が行ったのは、石巻の仮設住宅でのアンケート調査でした。6月の半ば頃で人々は抽選順に避難所から仮設に移っている頃でした。私にとってアンケートはただの口実で、実際に行っていたのは『キーマン探し』です。粗品を持って一人で黙々とアンケートを行ながら仮設に住み始めた人達と話をていき、「この人は！」という「一人」を探していました。バランス感覚、求心力、そして一番大事なのは人柄。たまたま仮設万石浦団地でいい出会いがあり、その方自身は車を持っていてカーシェアリングが必要なかったのですが、熱意をもってお願いして、団地内で利用を希望されていた方々の中心に立っていました。少し強引でしたが、それくらい『人選』を重視していました。

3. カーシェアリング研究『情報は動きながら獲得する』

車と人の目途がついでようやくカーシェアリングの研究を始めました。一般的に何かを成そうとする時、研究や調査から始める人が多いですが、私は先に思い描ける範囲で動く事から始めます。動きながらどういった情報が必要か明確にしていき、的を射た情報を獲得しながら現場でのイメージを明確にしていきます。

カーシェアリング業界大手の企業、カーシェアリングの研究調査を行う

国交省の外郭団体、カーシェアリングを行う市民グループ等片っ端からアポイントメントを取っていき、情報を収集していきました。情報を取っていく中で次第に私が照準を合わせ始めたのは、スイスでカーシェアリングが始まった頃の原始的な仕組みです。要は原点に戻してみるという事です。その情報を特に注意して獲得しながら、誰でもできる被災地でのカーシェアリングのイメージを作っていました。

4. 利用スタート『決断が主体性を生み出す』

大体のイメージを持った上で、最初の車を仮設万石浦団地に届けました。さて、ここからが本当の挑戦です。集会所に集まった利用希望の方々とカーシェアリングの活用方法や使い方を話し合っていただき、一つずつやり方を決めていきました。

ここで私が大切にしていたのは、利用者の皆さんにしっかりと『決断』をしていただくという事です。正直言いますと私は、カーシェアリングについて事前にある程度研究して活用方法については現場イメージを持った上で、皆さんと接していますので、どういう仕組みで行うかという私なりの答えを持っていました。しかし、敢えてそれを出さずに、利用者のみなさんが生み出す発想を大切にしながら、最低限のナビゲートだけを行いました。そして「利用毎にカンパを集めよう！」とか「予約はノートを集会所にぶら下げてやろう」とか一つ一つ決断していっていただいたのです。

「この取り組みは自分達で作っていったんだ」そう思ってもらうこと、言い方を変えると『主体性』こそが生き生きとしたカーシェアリングを行う上でとても大切なことなのです。そのためには、時には、自分は何も知らないように立ち振る舞い、手柄は全て渡してしまい、一切前に出ないという姿勢が非常に重要なのです。それが『育む』という行為だと思っています。

5. 公はきっちり押える『境界線を見極める』

行政には石巻に入ってすぐ挨拶に行きました。宮城運輸支局、石巻警察署には石巻に入る前から事前に報告し、了解をいただいた上で仮設万

石浦団地のテストを行いました。しかし、TVや新聞にその様子が取り上げられると、改めて連絡があり、「管理方法や契約書の内容などもう一度確認させてほしい」と指導が入っていました。

公の機関に対してすぐ批判をする人を時々見かけます。この支援活動の中で、役所の担当者を怒鳴りつけている方を見たこともありますが、私は単純にエネルギーがもったいないと思います。

私がいつも意識しているのは『建設的かどうか』という事です。そして公の機関に建設的な提案を行うために必要なのが、その機関及び担当者の役割と立場を理解して、許容できる『境界線』を見つける事なのです。「ここまでできるけど、ここまでできない」の中心にあるグレー色の部分です。県警の担当者に真正面から向き合い、毎日境界線を探りながら電話とFAXのやり取りを行いながら共同で見つけたのが、次の基本的な仕組みでした。

6. 基本的な仕組み『ルールは最低限で』

私達は、グループの中で一人代表者を決めていただき、その方に協会の正会員（社員）になっていただきます。そして、正会員の方以外の利用者は準会員になっていただきます。正会員の方の住所を『使用の本拠の位置』として、その場所で車庫証明を取得します。そしてグループに協会名義の車を無償で貸し出します。最初は、代表者に名義人になっていただくという形で考えていたのですが、複数人で使用する車の名義人になることには、皆さん抵抗を示され、協会で引き受ける事にしました。

鍵の管理は、正会員が責任を負い、正会員もしくは正会員に任命された準会員の方が管理します。利用者は、運転の度に運転日誌をつけ、いつだれがどれ位車を使用したか記録で残すようにします。保険は協会が一括して加入しています。保険料は1年目は寄付で賄うのですが、2年目以降からは実費を利用者の方々にご負担いただきます。（※）

※後に2年目の保険も乗用車3万円、軽自動車2万円の補助を入れる事になりました。

以上が基本的な枠組みで、それ以外の細かい事（予約方法や経費の積立等）は、利用者の皆さんに話し合いの上で、自由に決めていただきます

した。ルールは少なければ少ない方がいいと私は常々思っています。ルールが増えれば増える程、人に対する『信頼感』が必要になってきます。リスク管理も当然大切ですが、本当に素晴らしい文化というのは『人への信頼』が保たれている文化だと思っています。だから私は、まずは石巻の人達を信頼して少ないルールから始め、本当に必要なルールだけ追加するといったスタンスを選びました。

7. 石巻に集中して展開『まずは雛形を』

約2ヶ月かけて最初の車の車庫証明を取得し、基本的な仕組みが出来上がると、精力的にポスティングと説明会を行う等情報発信していく、実施グループは日々増えていきました。最初は実績がない私達は警戒されたり、共同で車を使うという事に抵抗を感じる方も多くいて、実施箇所を増やすのにエネルギーが必要でした。しかし、提供台数が増え、マスコミ等でも報道されるようになると、口コミで一気に広がっていきました。

1月にガリバーから25台の提供を受け(先にいただいた5台と合わせて合計30台提供いただきました)、それらも月10台位のペースで一気に提供していました。しかし、私達はあくまで『石巻』に集中し、他のエリアでの実施は敢えて行いませんでした。『石巻できれいな雛形を作る事』、これこそが全体から見たら一番の貢献になると考えるからです。万石浦団地での最初の1台を2か月かけて丁寧に型を作っていたのも基本的にそう考えるからです。

8. タイアップ『機会を作る』

カーシェアリングを進めていく中で私達は、様々な形でタイアップを実現していました。整備の専門学校に授業の一環としてタイヤ交換・点検整備を行っていただいたり、地元の大学のゼミの教材として学生達に協会の会計業務に取り組んでいただいたり、デザインを学ぶ学生達にロゴやキャラクターをプロデュースしていただいたり、その他さまざまなタイアップを行ってきました。

タイアップの対象に学校が多い事からもわかる通り、私達が意識して

いるのは『機会を作る』という事です。私達にとってはコストがかかるだけのものが、別の人にとってたら貴重な機会になる事もあります。企業協賛や活動を手伝ってくださるボランティアの方々についても、コチラが何かを受け取るという事よりも、機会を提供し、そこで関わる人たちが何かを受け取るという事を大切にしています。だから、信頼関係が生まれ、タイアップが成功すると思っています。

9. これからのこと『誰も実現していない事をやることこそが仕事』

提供台数が60台を超える、今私達が取り組んでいる事は、おおざっぱに言うと『カーシェアリングの質を高める』という事です。提供した車を活用して、「どこまで地域の役に立てるか」、「どこまでその地域の主役を作れるか」、「どこまで助け合いを生み出すことができるか」、そのあたりを中心に据えています。

2月から石巻市より事業委託を受け『カーシェアリング・コミュニティ・サポートセンター』の運営を行っており、そこでは利用者の中の有志4名がパートとして、カーシェアリングサポート業務を行っています。

その4名のパートの方々は、毎月最低1回は利用者を訪ね、利用状況を確認しながら、問題があれば相談にのり、一步前に進むための提案を行っています。また、質の高いカーシェアリングを行っているグループをきちんと評価し、経費の面でサポートする『エクセレント・カーシェアリング応援プログラム』も始めました。

そういう活動の延長線上で私達がピントを合わせているのは、復興住宅での電気自動車カーシェアリングです。石巻市は災害公営住宅に太陽光パネルを設置し、そこから電気を供給するスマートシティ構想を発表しました。太陽光パネルで車を充電し、蓄電を行う事で災害時など万が一の時には電源となり、その車が普段はカーシェアリングで助け合いに活用されている、そういうスタイルを目指しています。

ここまで実現できれば、石巻はハードの面でもソフトの面でも一気に時代を作る最先端になります。石巻の利用者の方々が、世界の一番先頭で誰も見た事のない風景を眺めながら、失敗と成功を繰り返し前に進めていくことで世界に貢献していく。そんな未来を実現する事が、石巻へ

の私なりの貢献だと思っています。

10. 最後に『一人』

以上、私が今まで行ってきた手順を要点を絞って整理してきましたが、他の被災地でカーシェアリングの取り組みを行うのは十分可能だと思っています。しかし、それは、たった一人、本気で下から支える人がいたるの話です。自分の頭で思い描いて、行動して、人を巻き込んで、変化を加えながら少しずつ形を作っていく事を一人で淡々と決断しながらやって行ける人がいるかどうかです。もっとシンプルに表現すると『一人になれるか』という事です。

実は、これはカーシェアリングだけの話ではなく、何か事を起こそうとするときには、私は『一人になれるか』という事が一番重要だと考えています。そういう人が何人か現れると、どんどん社会は変わっていくと思います。動きましょう。そして東北から日本の扉を開きましょう。

【プロフィール】

震災後、車を集め。企業まわりから始め、協会を立ち上げる。7月に一台目の車両を仮設住宅に届け、各種行政機関や利用者の方々と共に試行錯誤を繰り返し、コミュニティが運営するカーシェアリングの仕組みを作る。現在石巻市の協力の元、仮設住宅『大瓜団地』の集会所の一室を拠点に置き、石巻市内を中心に約40箇所で実施されているカーシェアリングのサポートを地元の方々と共にしている。震災前まではペーパードライバーだったが、震災から一年が経ち、ようやく車の運転に慣れはじめた。

【連絡先】

- ①〒 986-0005 石巻市大瓜字鷺の巣45-1 仮設大瓜団地集会所内
- ②電話・FAX 0225-22-1453
- ③メールアドレス info@japan-csa.org